遠山奇談後編 三

2244

ふじ山奇談後編巻之三

衣がさき濤のうけ
湖水の七ふしぎの事

○第十三章

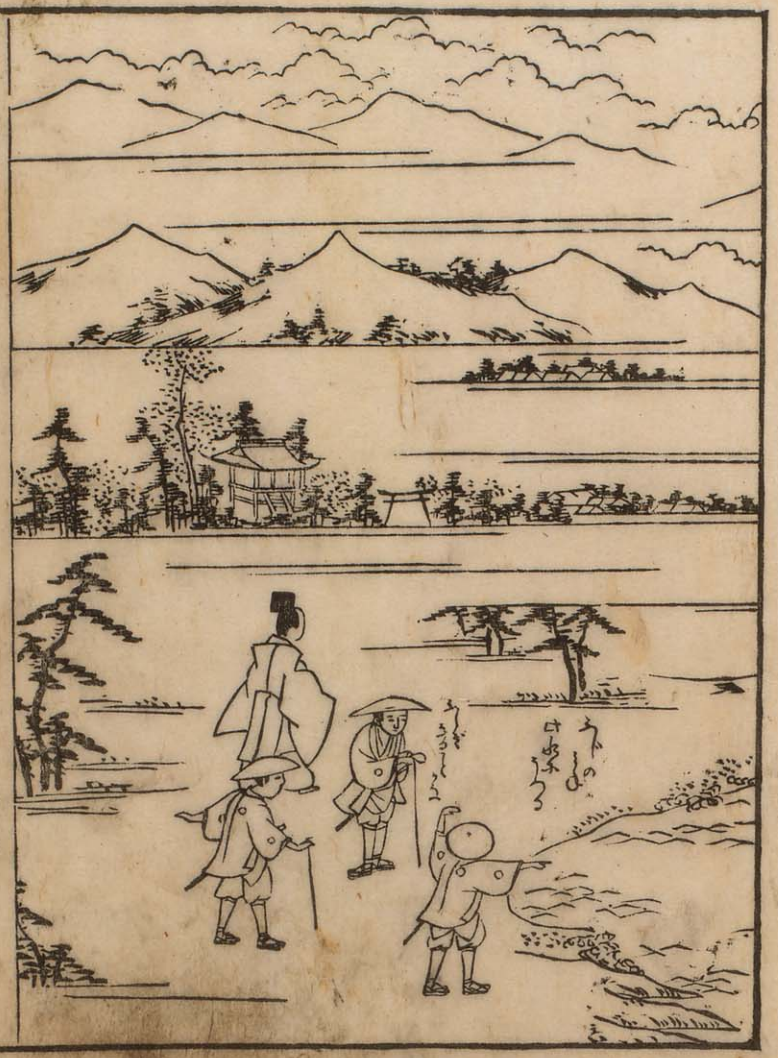
さと山のうちに。神仙山獨り清らかなり。殊に山のうへ
なし。甲斐信濃をうしなふ。その下にれんげしよそうなる
須彌の海の水の白き峯の上にかゝり。神仙山にして駿河なる
森ふく白。此所ハあれハ神仙須弥山をさしてかはらし
殊に山のほとりに住の人にいはく。あたりを来合せ。
こゝより富士山の神仙のくわしさはまたしかいふ
も神仙くらし。あのごとくに雲霧にかくれてしばしの
隠さらば。さゝふしぎなるものあり。此ふしぎ衣が崎と

いつき霊地なり。むかしハ雲霧にとぢられて中〳〵
目も及ばず。皆白やみなりしに冨士山なり。その冨士
こそよりハ雲霧をはらひしといへども。此衣崎の水をもちて。
清くなれバ。その冨士の峯。宛がごとく人の目にうつる
なれども。峯ハ湖中にうつるなり。されバその時にあらはれ。四月は
山の上より。湖中にうつるといふ。不尽といひ。押して その
よしを知るに。いにしへ神代の末に。精進湖。加葉
その清衣を清らけし。冨士の地にうつりて世の富をもたり。
福田の藪となるにして。後にも地中にうづめる。又その
衣状とぞいへり。此地に浮ぶ理なり。此縁にありて。ふつと

衣が浦といふは富士の裾野にあり。此所にふ
うつるこうどく衣がうらにて此所へくるとあれども人の
あれどもの人間にふうらくすると云ども
のうつるかとえてこふつりぐ雪をること幻じ
とつぶらく寺うるおひなるおとそ
々此須波のこゝろくのうだうこゝあり。
須磨の七うぎくいろいせりあるけぶぞる
い上のえ光地者の遠元。紙とあてこれ懐の紙
うるこたり。後ふ懐そのあうりうこ。仏ご懐ふ
うつるつぶけくふこれど衣がうた富士のうた。

東に富士ある西へ行ちうこ。ふこ
此懐に紙なして紙にうこ。へうこうだなり
○これふ紙にあ書こあり。千に入ひも
のこ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
うあり。法華寺の南つ屋城門西と。世伝伊
こ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
大きとこ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
懐のうげ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
の。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
こうふみ伊勢の御水。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

ありて又門松の七五三縄をしめ、一つに御酒、二つに市
場田、三つに耳裂麻、四つに社殿の前、五つに根入松、六つに塔
のうげ、七つに地特なり。一つに社殿うしろに、水流れ一面に
ひらくこと、水流のごとく流る。毎年五月の節
ふるまいの水、うるべ一夜ふるごとく市流れ、
ひくく流れ、前と後へ、ものいうて及びぬ。荷馬ばくば
踊ゆふおしゑ、考つくこと、なく。神妻うるべの流れ
なり。此時法を祈てひくく流ることとうて、人皆ちうう
でつて、人流れくじむこと、いに、芸伝のいてくれぬ。
ちうべ祈種水とうて、此妻ちうべ、祈とちうべ



又は氷とうごちて流するものあれば掬ふもの掬と捧。
うしはいるもの為人をたゝ年ふる所を為ること不可。
ちて又一面ふ氷あれども。松山温泉の池ふ氷
為し。氷為きゆ。氷とうごちて流するを為氷のと
人馬不免はまるることをふんしく。寄とまべし。
氷のいるうちは沈れ沈没する人あれば春ふ弱と入て。
氷のうへとひくにて弱のなく不の下ぞくしく戸とる
とゝふもふめく　○ふるふ三のうち。仕業の奥の院
のり坂とあり。山の方れ流るふ。元二丈ばかりある
ふあり。雪と縮るごく入て。苦しきもの。寄ゆる

出来り。大人小児ようだいん。ぞくしきうつ凧をもて遊ぶる
と。鳶ちつるおらりなきれば。此に奇なり。儒者を指げ。一寸指
しさく。孔子清浄なてしよぶどり合せやまるべし。信ともとあく
ねがひ。鶏一羽捕まへ。ちょうせんのさへに是ぶべ。孝子人の前
角へ。鶏をおさへて。又ゆるぎるを右の手にて角をつかみ
くらやてしる。道のきを画ても。鶏のうかがむらてもあるべきよし。
ありあれど。気人せうしてそれ夥く鶏をかれば鶏も寄
してもせんとく。これは孫獅子の事なれども。猿子の霊
なるしはじしく

〇第十四章　風鳶のこと

風鳶ふてはまのそわりてありそもとふへいそりても。けるう
唐の書に風鳶の出ありといふ。うむしへ藤立の時
此掌なく。唐祖棒とてかつてかくを。うるすこし飯田
の所にある風鳶あり。掌に白く模様ありしてにあり。〇又
本田藩ふうふびく。風鳶藩あり〇松本の小倉書新田より
乳擂へぞつなか。風鳶作とむ宮あり
〇周にいふ此風鳶というあるふりて是はすべて。国境
郡ざうひにあるくろへ。国ざうひは穂づく風あるく吹ゆく。
東郡と信つるに風鳶のさかあり。是は風の吹くこと
いふ中ふあるべ。藤をするは。唐祖師と是つるふへ。風紙

のくにうちにかはりてもこの法をたもつべき人あらば
とをくこの法をもちてしばらくもとどまるべきに
法をいとをしみけのごとくに刀杖をくわへ
瓦石をなげうつ人ありとも
忍辱の鎧をきこの法をひろめんとこそ
思へどもいまだ一分もこの
ことばのごとくにはあらざるなり
されども我が弟子
ことばのごとくにもしたがはば
ことばのごとくにもしたがはざらん
人のなかにこの法華経
をもたもつべきなり
されば法華経の
ことばのごとくにもしたがはば
ことばのごとくにもしたがはざらん
人のなかにこの法華経
をもたもつべきなり

○第十五章　新尼御前御返事

新尼御前御返事

ことしの春のころ
とをくこの法をもちて
ながらへたりしかども
ことばのごとくにもしたがはざりし
人のなかにこの法華経
をもたもつべきなり

○第十六章

ことしの春のころ
とをくこの法をもちて
ながらへたりしかども
ことばのごとくにもしたがはざりし
人のなかにこの法華経
をもたもつべきなり

雇人のつゝふかけ。ぬぐ所をもつゝ妻なれども
女と夫にはれ者ありしとやいふ時ひそふ者ふて
けあと術ひられんとしたふ女を術ふ仙学をそれ
より夫婦なり。○夫婦ゆきて男る一人とうむ。
けるこの子のけつゝぬぐ所をゆりとたりとれが
夫ひまふ乳と会ゆきて所家に入りそ袋とられが
よく所ひるが美ぬのとりより狐の尾入て久るぬぐさ
そ袋さひそふ乳場とそり。狐面へつぐらくゆ
しやれまぐ者美れ女ひーぐらくあるばくを
もらりくいそ記夫とそりくやひの狐くとれふ因縁

なくやれが見と佐人若なり。ゆりくへせひりそ
生体とそん乳ひせーやらくそ毒さうぬとふすそ
べーと又改ふゆりたる門拾ゆくやらがくひへふ。女
ぬどろ紀生りやいつものどくみく。そけもそ望日
又所ひ日年面へゆりしが。この子母の張ぬと欲く。
ぬぐ袋ゆく。板ゆきのやれが性体ちりとそんとがやそ
くとそりく袋とかくせーやさそくくりりやどの夫ふ
それーけひ紙ひりくくそ又れそふなりてゆや業
の中ふけこ子の小ひやれらつのもてけせとけりくん。
ひの性体とりくよがやそのくいなたのやそへれふ性体

とかくせ弱いせうしハ。他が誤なり。せめて孔子。乳の世をも
なかにわらふなるまでハ今一たび字ハ多りくろうた。ひとり
くわしき注意めでも。行の支にもなく。さかくするといふやん
業の中ふ。光見の世き。かれてハ。毛とつひへん若しく蓋し
月日と送りなるりぶふ。家の孔子に蜀菜也孤の子ハ八十有餘
まで。なかく。延寿のころがなくめよいふを子孫今絶さえて
孔子ふく旁称の大百性てめ。今ふ整思せしが。子孫
まてありいづれも家とし孔皆亀くなるが。孔血脈の子孫
の堂へいづれもし皆丸して記格とつんてうんするて
此積を林続の上ふ。ある物ぐ依恭の墓あり。それの先祖
なりとて。そと家よりも積すると。おぐさ孔へ信濃新
江の人よれ。孔新江ハ今孔新んの村ともいふ

○孔彦なりとゆのふ。志のぐまるでいそいふよしゆくり
ゆかれめづらしきこともなるまの仰く皆く嘆じぬ

○第十六章　此章ハ瑞ある事ふ分草をふ半

安芸の郡の國むしの山中ふ入て。山の積まをたづぬ
けるふそどめ犠ふまあてそうりが。ありて人安葉御て
いそ。峠ふしとくく秘石ある。日本ふて孔山なるまで
わかなし。吴国の瑞石を以て神と云まのなりといふ。
まれそりよくきれが。機ふ村く和ふの温石とめ差る

又鰹ぶしにぶどう石ふもまきり。真の青四ふて。
これ今く。石や敷剪ふ用るふいをけぶく毛筆の
石ふまきる　まつるよふのものを。色くはをおりくしらたて
色人くるるふ毛筆の硯ふと一ふうて色てて又
又不ると信くはくの硯石あり。又ある不りのどれば
硯ふ用ぐと。まつふん扇入などをふ。きこ沼洲
ふ物石より。凡一信りぐきく毛色。又はふふきふ
あり。毛のりふく。りふりたるとふふ〜の
毛まり。他ふく〜ふふふ物ふしたふふく
あり。毛ふふふふ入ふ。ふりりふ流の物物ふふ
用ふ毛ふし。中毛筆の竹ふなどと逢ふふふふく。

毛ふ物ふふ物ふ。ふふ毛ふふふふふ
とふふふふふふふふ。ふふふふふふふふ
ふぐふふふふふふふふふふふふふふ。ふふ

○第十七章　八つぐ物ふ三光ふふふ

物八十年ふふ。老物鬱ふふふふ。須波の御射ふ
ふふふれぐふふふるふふふふぐふふふ雪ふふふ。ぐれ
ふふふ物ふふふふふふふふふふふふふふ。ふふ

佐久間郎左衛門の祖乃ぶさ山を世り立る事。
此社は神武天皇の光臨なる社なるの社の八ヶ嶽の名
に。日月星辰の光を八ヶ嶽に佐久間郎左衛門西ふ
えるを社壇とぞいでもさく寄しえべし

○第十八章　さくまのふもと

忠平郎ふたぐしよりてえ桜一面をうりそ山と
なへぐ。むりのこしをしぐこし芳野ふなしべんとて。
しの桜とぞりをうふち此さそふ花せ。
山に一面のちくく今を始り桜ふえてをちく
桜多くしの作しんぞる作をもしじ。

さくふ作の本にまれみく。桜のをくぞ山の今花をの
人に拾ぞ作。此の人代をるふふをしぐ芳野の花に紅の面
光ふをうをうぞ今に美木多なりく。桜とかくん桜
をべしくしのもぞりにしくとぞ。みして美木ア
しじをぞ。今をりて桜をれをるをもりしぐ。ちて芳
野をもゆをるやうに美花。美花の付に桜ふ絞りれて賞
ゆくをぞ。ふて名のうふ美をしぐを付に花の末
ふ花ちりのくく。山一面ふちくくとをて。一入賞しぐ。
くくより。去の糸をも。今をしみくちく。更級の月と並
をのふ美就せしかぐもぞ。芳野代花に代さしをを花

所ふうとく。那聖者してい。若所も定給く。一ぬへ
ようく。夫婦のごとくとりて。一入おり。高砂の手に
きもせぬたぐひ。れんの様をもつ。わたかるるぶ。えん
ひりかつれげとぐれんのさとりのことを。毒くきく。
ちくくりぐ。けぶちとんふけ。くくうれの
けせ極楽鳥。ちく。大れの音阿ふ。様の拍子。見と
天竺仏石拍子。なぐく。仏教の拍子。十口子へ
法ち。○月くちく。のふまちる。けさく。仏道てそ
ぐく。根本の天竺い。緒句まけ。なり。ケ。けれく
ちんふ。ちる。ケくけ。ぢに。せん。今くちいちてく

八ヶ岳
三光
佐久男郎
松本のつーちの
ちゃちゃ山まつろう

みだりしがそれぐの喜(よろこ)ぶべき業(わざ)まかせ。中にも天地(しぜん)の
ものゝよろこびをあらはしけり。桜(さくら)のかゝるべき。これも陽春(きさらぎ)の節(せち)
目(め)に明(あき)らかなる桃李(ちょうえん)の付ときぬさそひもしれずしたがふ。
山の桜とかくやうにふぜひよろこびも分(わか)ず付合(つけあひ)よろこびぬ

○第十九章　金峯山や箱男のこと

金峯(きんぶ)山といふ山は。険阻(けんそ)なる谷(ふか)く深く高(たか)くそびえし。推(すい)
量(つもり)すべし。山中へゆきかよふ道も遠く人みな恐れある道。
これは世の人金峯(きんぶ)の寺院(おんゐん)をたつといひて。奥の院を金峯(きんぶ)の寺(おん)とす
内(うち)にいれば。人の噂(うはさ)を聞(きく)に。牝犬(めいぬ)ありけり出の寺院(おんゐん)をまもりて。
門に毎年(まいとし)かよひけれど。見物(けんぶつ)の者(もの)しう。さんざんきくに中々

密男ふ名たてゞうしといふて。さればむかしの宗像にふけるに
ふれは丈夫と又其のうつりて。人とならしむる人とうぶる。
こゝろぬけし わつくと二夢之奇夢にならば。時には。松
人とても。かへりて。山と逢ひて。うけるかいと一夢みるるに。
わくしあれど。見れは。おかしくも懐かし二夢三夢に。見丈
しくらつれて。何気なくて。つゐにのがれむものゝ。くるしも。
こゝろうしそれは。人間ふ之婚礼ども。見てはえ見へ
〳〵。腰をとりて。夢もうれば驚き。姿の白けし
髭そりたれは。寒むしつりたるまゝ。しわ本の毛を抜て
其のぼくしく。身につけたり。糟はやすぐにさだりけるて。

いよおそろしく。われ少々小銃と拵へ申しあれべきれの
旅と書ふ。谷へ下さくより。松人は折しも身でも。懐の逢
いうるうしくさ之夢は本に。せらんかけれは。うつつふ来る。
そのまゝと中す利し去れは。ふて入でも。路のうへにも。そうつと
さるあるものは。殺ふ山にうつらてそして逢し。おるさ述ふ
の盗賊は信山を退き去らんしく。身を返さんとす。考ふるに
其ひ居りしが。山丈に精あそれ。ぞさんぞふ逢ひうれども。
さや二人にでは。引つれ申して。さるものに人なしが。肝をひやし
て逢さるゆへ。松人ではあやしくせひ。皆集り。そこへと
来て年。絵をとらふ。盗賊がうつ生捕ふして。その宮へ

[illegible]

[illegible]

〇[illegible]山叟のことは前篇の[illegible]山奇縁に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]前篇の[illegible]山奇縁と[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]続篇へ[illegible]

[illegible]前篇。後篇。続篇と[illegible]奇[illegible]

[illegible]

[illegible]山奇縁後篇巻之三終